

福島・荒井猫田遺跡  
あらいねこた

1 所在地 福島県郡山市川向、安積町日出山

2 調査期間 一 第一五次調査 二〇〇一年(平13)五月～二〇〇二年三月

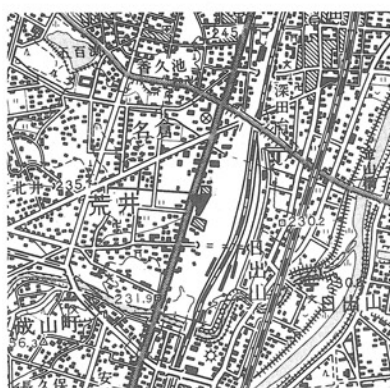
二 第一六次調査 二〇〇二年四月～九月

三 第一七次調査 二〇〇三年五月～八月

3 発掘機関 郡山市教育委員会・(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

4 調査担当者 一 高橋博志、二・三 高田 勝

5 遺跡の種類 町跡及び館跡



(郡山)

6 遺跡の年代 一二世紀後半～一六世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

荒井猫田遺跡は、JR郡山駅から南南西約三・二kmの地点にあり、市内中央を南北に貫流する阿武隈川の左岸段丘面に占地している。

発掘調査は郡山南拠点土地区画整理事業に伴い、一九九六年度より実施しており、二〇〇三年度までに七万㎡余りが終了している。

この遺跡は、南北道路の両側に展開する鎌倉時代から室町時代にかけての町跡と「館A」「館B」と仮称する二カ所の平城によって構成され、町跡及びその南端東側の薬研堀に囲まれた「館A」と主郭・副郭が障子堀に囲まれた「館B」との間には、南西から北東方向に流れる埋没河川が確認されている。

出土遺物には土器や陶磁器のほか、木製品、石製品、金属製品、骨角製品、植物種子などがあるが、埋没河川南側の町跡及び「館A」では、一二世紀後半の輸入磁器や国産陶器が一定量確認されたとともに、一三世紀から一四世紀までの輸入磁器や国産陶器が比較的多く見つかっている。また、北側の「館B」では、一三世紀の輸入磁器が少量見られるものの、町跡が縮小し始める一四世紀後半以降、一六世紀までの国産陶器や土師質土器が多く見つかっており、わずかだが一七世紀の陶器や土師質土器も確認されている。

さらに埋没河川では、一三世紀から一五世紀までの陶磁器や土師質土器が見つかっており、これらとともに四八点の木簡も出土している(第三次調査)。なお、第一四次調査までの概要や出土木簡については、本誌二二・二三号に掲載しており、併せて参照願いたい。

一 第一五次調査

「館B」の主郭を囲む障子堀(一七号堀跡・内堀)のうち、南面を

囲む部分とその南側の外郭地区（主郭と副郭を囲む堀の外側の地区）の二地点を主に調査した。このうち外郭地区では、第八次・第一次調査で見つかった区画堀・溝の続きや新たな区画堀・溝、多数の柱穴・土坑・井戸などを検出し、館跡に関連する遺構が南側にさらに広がっていることを確認した。

木簡は、障子堀より一点、外郭地区を南北に延びる区画堀（一九号堀跡）より三点出土した。他に木簡状木製品が二点ある。木簡の年代は、土師質土器などの共伴遺物が少ないため明確にできないが、多くが一五世紀に入るものと考えている。

## 二 第一六次調査

「館B」の主郭南西部とその西を区切る障子堀や、主郭東面から北面を囲む副郭の北部、及びその北側の外郭地区を調査した。このうち主郭南西部では、第一次調査（主郭の約六〇％を調査）と同様に多数の柱穴と井戸・土坑などを検出した。また、北側の外郭地区では、攪乱の影響からか館跡に関連する遺構は希薄な状態であった。木簡は、障子堀より四点出土した。木簡の時期は、障子堀の年代観から一五世紀以降と思われる。他に木簡状木製品一点がある。

## 三 第一七次調査

「館B」の外郭地区のうち、第一五次調査区の南側に隣接する二地点の調査を行なった。どちらの地点でも第一五次調査区と同様の遺構群を検出したが、このうち第八次調査区に西隣する地点では、

第八次・第一三次調査で見つかった埋没河川の続きを調査し、館跡に関連する遺構群の南限にあたることを再確認した。

出土遺物は全体的に少なかつたが、埋没河川から二一点の木簡と木簡状木製品三四点が出土した。これらの年代は、他の埋没河川出土遺物に時間幅があるため明確にできないが、これまでと同様に概ね一五世紀と考えている。

## 8 木簡の釈文・内容


### 一 第一五次調査

#### 一七号堀

- (1)  大日如  $(186) \times 17 \times 1$  061 第二三二号

#### 一九号堀

- (2)  大日如来  $(87) \times 16 \times 1$  061 第二三〇号
- (3)   $(191) \times 17 \times 3$  061 第二三三号
- (4)   $(240) \times 12 \times 1$  019 第二三三三号

(1) (3)は上端部が圭頭状で、下端部は欠損する。これらは、いわゆる笹塔婆で、(1)(2)は  (バン) と大日如来を組み合わせている。

(4)は幅の狭い長方形で、墨痕は判読できない。

## 二 第一六次調査

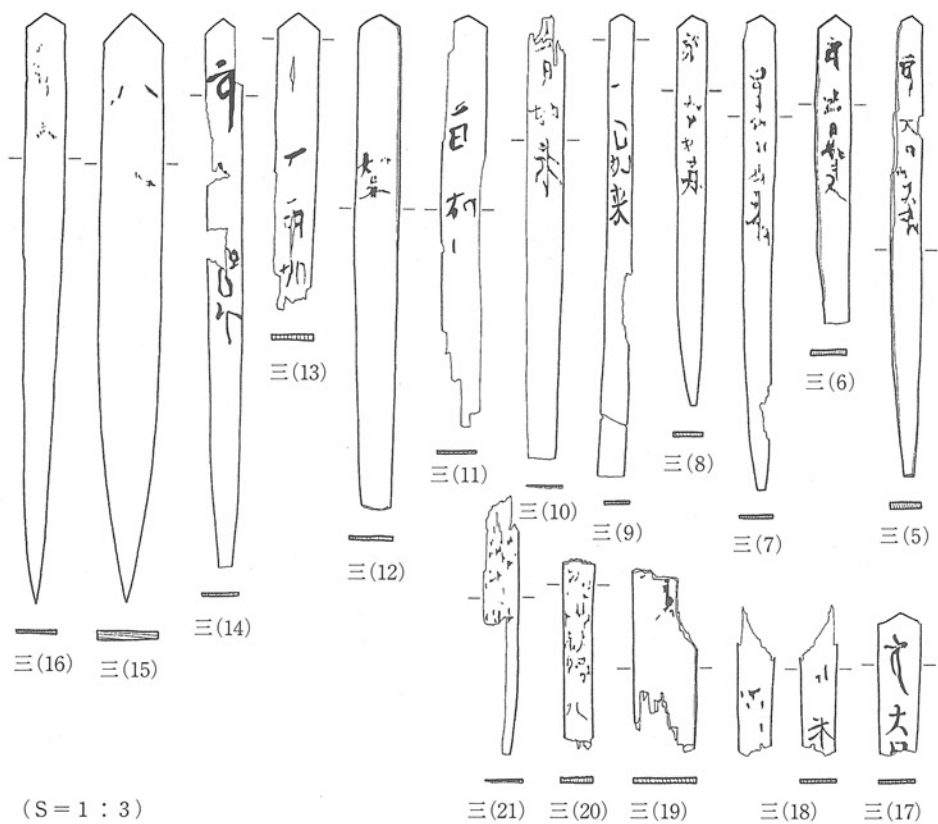
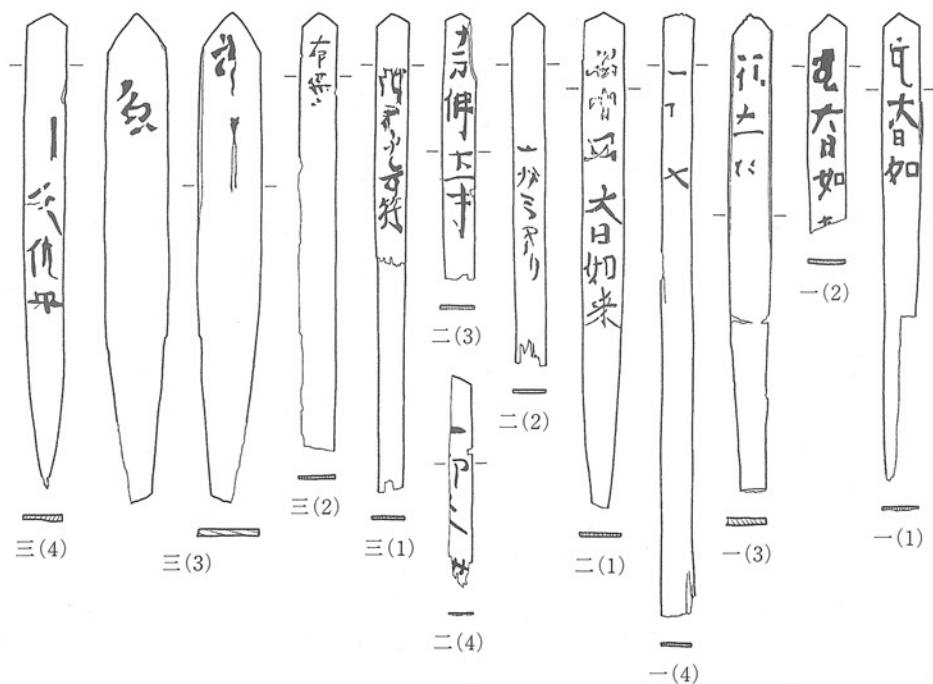
- (1) [□□□]大日如来 (198)×17×2 061 第二三六号
- (2) [□□□□□] (140)×13×1 061 第二三七号
- (3) [十方仏土中] (106)×14×1 061 第二三八号
- (4) [□□□□] (82)×(9)×0.8 061 第二九号

(1)は上端部を圭頭状とし、下端部を尖らせている。(2)~(4)も上端部は圭頭状だが、下端部は欠損している。いずれも笹塔婆だが、(1)の「大日如来」と(3)の「十方仏土中」が判読できるのみである。

## 三 第一七次調査

- (1) [ ]符 (191)×13×1 019 第一四一号
- (2) [南無×] (175)×15×1 019 第一四二号
- (3) [ ] (196)×25×3 051 第一四三号
- (4) [ ] (190)×16×3 051 第一四四号
- (5) [ ]大日如来 (189)×13×1 061 第一四五号

- (6) [ ]大日如来 (123)×14×2 061 第一四六号
- (7) [ ]大日如来 (189)×13×1 061 第一四七号
- (8) [ ]大日如来 (156)×12×2 061 第一四八号
- (9) [ ]日如来 (184)×11×1 061 第一四九号
- (10) [ ]日如来 (177)×15×1 061 第一五〇号
- (11) [ ]日如□ (143)×17×1 061 第一五一号
- (12) [如来] (196)×17×2 061 第一五二号
- (13) [ ]日如× (118)×17×2 061 第一五三号
- (14) [ ] (218)×15×1 061 第一五四号
- (15) [ ] (235)×25×4 051 第一五五号
- (16) [ ] 245×16×1.5 051 第一五六号
- (17) [ ]大 来 (56)×17×1 061 第一五七号
- (18) [ ] (59)×15×1 061 第一五八号



(S = 1 : 3)

(19)



(66)×26×2.5 061 第一五九号

(20)



(76)×13×2 061 第一六〇号

(21)



(103)×15×1 061 第一六一号

(3)~(5)(7)(8)(15)(16)は、完存もしくは下端部が若干欠損する資料で、これらはいずれも上端部を圭頭状とし、下端部を尖らせている。また、上端部のみが遺存する資料はすべて圭頭状で、側面に切り込みなどがあるものはない。墨痕が判読できるものはほとんどが大日如来を表しており、金剛界大日如来を示す梵字(バン)の下に漢字で大日如来と記すものが特に多く認められる。形状・墨痕の内容から、これらの大半はいわゆる笹塔婆と考えられる。

なお、荒井猫田遺跡から出土した木簡及び木簡状木製品は、今回の資料を含めると計一九五点となる。このうち木簡は九二点で、判読できたものはその内容からいわゆる笹塔婆と呪符木簡とに大別され、数量的には前者が多数を占めている。

## 9 関係文献

郡山市教育委員会・(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団『郡山南掘点土地区画整理事業関連 荒井猫田遺跡(Ⅱ区)―第一五次発掘調査報告―』(二〇〇三年)

(高田 勝)

## 福島・河股城跡

かわまたじょう

1 所在地 福島県伊達郡川俣町

2 調査期間 二〇〇二年(平14)五月~十一月

3 発掘機関 川俣町教育委員会

4 調査担当者 井上浩光

5 遺跡の種類 城館跡

6 遺跡の年代 古代~近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

河股城跡は、福島県中通り北部の伊達郡にあり、県の東部を南北に走る阿武隈高地の西側麓に位置する。川俣盆地には南の三春街道、



(川 俣)

北の梁川街道、東行する相馬中村街道、西行する二本松街道などが放射状に集中し、中世には興福寺領荘園が置かれ、小手郷として繁栄した。

戦国時代末頃は伊達政宗領の最南端に位置し、東は相馬義胤領、南西は大内定